生む活動

―話すこと―

藤原與一

一

われ〳〵が生きていくということは、まさに、生をいとなむことであろう。生のいとなみは、人間の文化活動である。こゝに文化を生もうとする良心がなくてはならない。良心から表現愛が出る。人間はこのような表現愛の人として、生むはたらきのつよさが、人間の力になる。人間の力から文化は生まれよう。

われ〳〵の話すという表現行爲もまた、もと〳〵、生むはたらきの、一大基本の實踐であるべきだ。話すことも、人間の生のいとなみとして、人間の生むはたらきの發現として、おのずから文化を生む活動でなくてはならない。これはわれ〳〵の生活じたいの問題であり、實踐の問題であり、今日明日の問題である。それはすなわちことばの生きた學問そのものの問題である。この行爲と生活とにはなれそむいて、ことばの學問、ひろく言つて、ことばで話されたり書かれたりしたものを見る學問を、考えることはできない。

文化を生むということは、じつはわたくしなりにしかわつてはいない。文化ということばをつかうのがいけないのかもしれない。ここで意味させたいのは、「その時のじぶんとして、生活の内容が、そのことばに充實している」ということである。その時のじぶんとしては、これで十分つとめている、内容空疎というほどではなかろう、と自覺することができた時、話す活動としては、良心的になつていると言えるのだと思う。

二

かえりみると、われ〳〵のまわりには、いろ〳〵の話す活動がある。それらはどのようなタイプと實質とをそなえているであろうか。そこにどのような文化活動、ものをうむ活動がいとなまれているであろうか。

ことばの奥に、その人の考えを見る。話しているのは、その人が、そのように解釋しているのである。話す活動の諸相を見る時、そこには、解釋者としての、いろ〳〵の人を見ることができる。話すことばに、その人の解釋、考えがみとめられ、その人の生活がみとめられる。

わたくしじしんのことになると、まつたくはずかしいかぎりである。ものを言つても、ことばがことばにならない思いをつよくする。生活の目がつまないのである。安心して話せる境地を、いつ得ることができるものであろうか。人の前に用意して出て話した時にも思いどおりに話せたことは、一どもない。思うことが言えないし、しいて言おうとしては、みずから迷路におちこむ、日常の談話に不用意の多いのは、ここに言うこともできない。

三

みのある話しのすすんでいる中に、じぶんが、はいつた場

合に、どうすれば、話しあうつとめをよくはたすことができるであろうか。いまのところ、一つには、話すことによつてじぶんの立場を明らかにすることがだいじだと思つている。これがなければ、話しあうことによつて、相互助成の文化活動をとげることはできないだろう。一ことき り出すことによつて、あるいは、ことばを順次にくり出すことによつて、そつちよくにじぶんの立場を展開し、積極的な見解を明示することができればよいと思う。會議はこれによつて時間をきりつめることができ、充實した應答に終始して、出席者のあたまは經濟的にたもたれる。

問う態度に立つということも、むずかしいことである。もとめる態度で發言することが、根本ではなかろうか。それが虚心にできれば問うべき時に問うこともできるのだと思う。また、問うのか言うのかときとがめられるような問いは、しなくてすむのだと思う。

「これしか知らないが」とか、「このことだけは知つているが」とか、みずからかぎつて答えて出ることも、むずかしい。「それとも知つている」、「それもむろん知つているのだけれども」というように、つい、うけひろげて出がちである。

四

話す活動を、みのあるものにするためには、どうしても、じぶんの日本語そのものを、整えてかからなくてはならない。論理的に、明晰に嚴密に、思考しなくてはならないと思う。そのように、ことばをはたらかさなくてはならない。とすると、ことばへの無反省ななれあいはきんもつである。はやりのことばやもの言いには、嚴正な批判を加えて、じぶんのものにしてから、それをつかうことが必要である。「何々の會を持つ」と言うが、「持つ」とは、ほんとうに、出席者として、その會の進行に責任を持つということでなくてはならない。本來、「持つ」というほど、責任を明らかに自覺する態度の表現はないはずである。「かもしれない」と言う。その「かもしれない」は、どの程度の推想なのか。「だいたい、さんせいであります。」と言う「だいたい」は、どのように辨別されたことばなのであろうか。修飾語の限定を、明確にする必要がある。けつきよく、おろそかには、修飾語がつかえなくなる。

日本語の不自由というようなことを、かるく〳〵しくかつことはできない。どこまで正確に表現しうるものか、その可能の限界は、つかまれていないことが多いのではないか。ことばを辨別すること、一々おさえることの不精密なままで、日本語をどうこう言うのは、あやまつている。日本語には、日本語のものを生む表現論理があるはずである。

われ〳〵は話す人として、どのように日本語の表現論理をつかんでいようか。いつもどのように、表現論理のすじ目にのつて、ものを言つているであろうか。表現論理の目をこえて、思考の目をつめることなくして、ものをうむことは不可能である。

ことばのうしろにからだがある。ことばはまつたく、全身

心的なものであると思う。人はふつうに、じぶんのあるきぶりやかたのふりかたなどに、反省と改良とを加えているであろうか。それがなければ、自己のことばも、くわしくはとらえていないことになろう。人とむかいあつて話す時、しんせいをだらけさせたままで、ことばをきりりとひきしめることができようか。まずからだから、ととのえてかからなくてはならない。からだからじぶん一ぱいにことばをのべることなくしては、ことばに責任を持つと言つても、どのように持つてよいか、じぶんにもはつきりしないだろう。一々のことばの責任を持たなくて、思考の目をつめることはできない。表現論理をきびしく追うていくことなくして、ものを生み出すことはできない。

ことばに正しくつよく生きるために、身体を訓練しなくてはならないことは、すでにいろ〳〵言われている。ここに一つ、清潔にからだをたもつことも、もとになるたいせつなことではないか。からだの清潔が、ことばの清純をもたらす。清純なことばから、高い實證精神が生まれる。

ペンをとつてことばを書いても、書くということは、書くいつさいのしせいに、えいきようされるものだと思う。

五

川端康成氏の「文章」から、左のことばを引こう。

○言葉は他人に分らねばならぬ。しかし分る言葉ばかりを使つて、彼自身というものが分らなくなつてはしかたがない

○言葉を棄てなければならぬ。やがて自分の言葉が生れるだろう。

○言葉を持たない人間にまで還れる人は、言葉の豊かさをまことに知る。

ことばをすてて〳〵、あいまいなことばに安易によりかかつている態度をやめきつて、じぶんの身をつめにつめきる時、その、おしつめたところから、じぶんのことばが生まれるだろう。じぶんじしんというものがじぶんによくわかることば、つまり責任の持てることば、責任からのことば、からだからのことばが生まれるであろう。じぶんのことばを持つということである。じぶんのことばが持てて、自己が立つ。ものを生む活動はそこにおこる。

すべての、ありきたりのことばや、まねのことばをはらいのけて、じぶんじしんにかえれば、はじめてじぶんのことばのはたけをたがやすことになろう。ぎり〳〵のじぶんじしんにかえつてはじめて、じぶんのことばを知る。じぶんのことばがなかつたことを知り、じぶんのことばを持つべきことを知る。また、それをどのようにも持つことのできる自由を知る。そうして、自己のことばの林を、どのようにもゆたかに生いしげらせて行きうることを知る。これほどたのしい、はりあいのあることはない。

眞實に生きるということは、自己のことばに正しく生きるということにほかならないであろう

六

自己のことばに正しく生きることによつて、眞實をもとめ

ることができる。自己のことばをもとめて話すことによつてその話しに、ある内容を生むことができる。

いままで無自覺であつたことばに目ざめて、その一語を、用意してつかうことになれば、そのもとめられたことばは、その人にとつて、新しいことばである。じぶんのものになつたことばは、じぶんにとつて、ほんとに新しいことばである。新しいことばで思考する時、新しいもの、じぶんなりのものが生まれる。

新しいことばをつかまなくてはならない。新しいことばを、われながらに、創造しなくてはならない。この創造の生活が、話す活動の本体となるべきである。その時、話す活動から、たしかに、ものが生まれよう。充實した生活とは、新しいことばを創造する生活であると言える。

七

社會にあつて、人がものを言つているということは、どこにだれがいて、何を言つているのでもよいというようなことであつてはならないだろう。ここにこの人がいて、こう言つているからには、それが世の中に役だつことばにならなくてはならない。じぶんのことばでうち出すじぶんのものが、他にすこしもひびかないということは、さびしいことである。ことばは、そんな孤立的なものではないはずだ。

學問をするということも、根本はこういうことばを、みがくことではなかろうか。學問も、本質的には、きわめて日常的なものであると思う。（二三、一二、三一）